

平成 26 年度厚生労働科学研究費補助金

新型インフルエンザ等新興・再興感染症研究事業(新興・再興感染症に対する革新的医薬品等
開発推進研究事業)

ワクチンの有用性向上のためのエビデンス及び方策に関する研究

研究協力者名 福島県立医科大学小児科学講座 細矢光亮

研究要旨；平成 26 年、福島県で発症した細菌性髄膜炎の全例調査を行った。細菌性髄膜炎は全例で 3 症例有り、2 例が GBS でもう 1 例は起炎菌を同定できなかった。インフルエンザ桿菌および肺炎球菌髄膜炎の髄膜炎は無かった。福島県において細菌性髄膜炎は減少してきており、過去 3 年間はインフルエンザ桿菌および肺炎球菌髄膜炎の髄膜炎は発症していないが、GBS による髄膜炎は散発している。今後とも全例調査を続けていく必要があると思われる。

研究目的；小児の化膿性髄膜炎が医療上問題になっているが、Hib ワクチンが導入及び肺炎球菌も結合型ワクチンが導入され普及してきている。疾患の疫学はワクチンが発売されることにより変化することが予想されるが、ワクチン発売前の疫学調査はなく、また発売後の接種率を正確に把握しないと、その効果の評価ができない。平成 19 年から平成 21 年までワクチン発売前後の髄膜炎の評価をしており、今回ワクチン発売後の福島県の細菌性髄膜炎の全例調査をすることは極めて重要である。また平成 25 年 11 月より 7 価から 13 価の肺炎球菌ワクチンに変更になっており、肺炎球菌の血清型の動向を調査するのは非常に大切である。

研究方法；平成 26 年 1 月から 12 月までの福島県内の小児科の入院施設がある 16 病院に対して、アンケート調査を行う。対象は小児の化膿性髄膜炎全例である。調査は個人を特定できるような情報は含めず、また研究期間中も個人情報の漏出内容に厳重に注意する。

研究結果；平成 26 年 1 月～平成 26 年 12

月まで 3 例の細菌性髄膜炎が報告された。

2 例は GBS (日令 19 発症；死亡、3 ヶ月発症；硬膜下膿瘍) であり、1 例は起炎菌を同定できなかった。肺炎球菌、インフルエンザ菌による髄膜炎症例はなかった。

考察；平成 22 年からインフルエンザ菌および肺炎球菌による髄膜炎症例は福島県下では減少しており、平成 24 年～平成 26 年はインフルエンザ菌及び肺炎球菌による髄膜炎は発症していない。GBS による髄膜炎は散見している。

結論

今後も、乳児早期の Hib ワクチン及び肺炎球菌ワクチンの接種を啓蒙し、今後も細菌性髄膜炎の発症動向を調査して、ワクチンの効果・有用性を評価していく必要があると思われる。

研究発表

1. 論文発表及び学会発表

なし

知的財産権の出願・登録状況

なし